

津和野町埋蔵文化財報告書

高田地区埋蔵文化財  
分布調査概要報告書Ⅲ

1995

津和野町教育委員会

# 高田地区埋蔵文化財 分布調査概要報告書Ⅲ

## 目 次

I.	調査に至る経緯	1
II.	位置と歴史的環境	2
III.	調査の方法と経過	4
IV.	調査の概要	4
V.	小結	30

## 例　　言

- 本書は、1994（平成6）年度に国、県の補助金を得て津和野町教育委員会が実施した埋蔵文化財分布調査の報告書である。
- 調査を実施した場所は、島根県鹿足郡津和野町大字高峯地内、通称高田地区である。調査地点及び小字名は第1表（P29）に示した。
- 調査を実施した遺跡は、高田遺跡である。
- 調査にあたっては、下記の方々にご指導いただいた。

広島県立美術館　主任学芸員　村上　勇氏

山口市教育委員会　古賀　信幸氏

島根県教育庁文化財課　今岡　一三氏

- 本書に用いた方位は、第1・2図は真北、第3図は高田地区座標北、その他では磁北を示す。
- 本書中に用いた記号TPは、テストピット（試掘坑）の略号である。
- テストピット実測図のスケールは第4・18・23図は1/40、その他では1/60である。  
遺物実測図のスケールは木製品では1/3~1/8、その他の遺物では1/3とした。
- 写真図版中の遺物番号は、遺物実測図の遺物番号に対応する。
- 調査に伴う記録類及び出土遺物は、津和野町教育委員会で保管している。
- 調査の体制は、下記のとおりである。

調査主体　山根津知夫（津和野町教育委員会 教育長）

事務局　竹下　宣孝（　タ　教育次長）

　　広石　修（　タ　文化係長）

　　山本　博之（　タ　文化係）

調査員　宮田　健一（　タ　タ　）

　　永田　茂美（　タ　嘱託）

調査補助員　堀　早苗

外作業員　三浦久男、三浦芳枝、倉益増衛、倉益清子、三浦千鶴子、三浦源太郎、三浦トヨ子、  
倉益愛子、三宅晴子、三浦リヨ子、三宅弘子、下森寿美子、安本和子、倉増信男、  
野村好江、舛成義一、舛成米子、羽山尋、河野八重子、河野武男、河野実、  
三宅キク、河野福江、河野里五郎、堀トミル、長嶺三千子、石井信義、石井紀美恵

内作業員　兼子和恵、河野美登里、青木光恵

調査協力者　鹿足郡津和野町土地改良区、岩崎仁志、西尾克己、守岡正司

　　鳴村公利、熊崎啓二、有徳克彦、民谷研吾（山口大学学生）

　　野村満、下森忠夫、羽山尋、野村誠、倉益増衛、倉益隆義、三宅キク、堀亀善、  
三浦芳一、舛成義一、三浦礼駒、河野静男、河野昇、河野智司、三浦源太郎、  
三浦一郎、安本要、落合健夫、倉増信男、三浦健志、河野武男、青木團次郎  
(以上、土地所有者)

ご協力いただいた方々にはこの場を借りて厚くお礼申し上げます。（敬称略、順不同）

- 本書は永田の協力のもと、宮田が編集にあたった。

## 調査に至る経緯

津和野町周辺における埋蔵文化財は、津和野高等学校元教諭で郷土部顧問の故岩谷建三氏によって1954（昭和29）年頃より確認されはじめていた。高田遺跡のある高田地区でも1964（昭和39）年に石鎚、土師器、須恵器が採集され、遺跡が存在していることが明らかとなった。当初は天皇原遺跡、鴻寄遺跡と呼ばれていたが、その後これらの遺跡を一連のものとすることが妥当と考えられたため、高田遺跡と一括して呼称されるに至った。

ところで、津和野町内では1977（昭和52）年度以来、町内各所では場整備事業が実施されてきた。高田地区においても団体営は場整備事業計画が策定され、事業主体者である鹿足郡津和野町土地改良区と津和野町教育委員会は、埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねてきた。早急に事業計画地内の埋蔵文化財の分布状況を把握し、保存についての措置を講じる必要から、1988（昭和63）年に島根大学考古学研究室の協力を得て踏査を実施した。その結果、広範囲にわたって土師器、須恵器、瓦質土器、近世陶磁器などの散布が確認され、さらに遺跡の遺存状況を確認するための分布（試掘）調査を実施する必要が生じた。そこで、1989（平成元）年度より埋蔵文化財担当職員を配置し、今年度まで計4次にわたる分布調査を実施してきた。今年度の調査も津和野町教育委員会の直営事業として、国・県の補助金を得て実施した。



第1図 高田地区における分布調査の状況（1/10,000）

## Ⅱ. 位置と歴史的環境

津和野町は島根県西端部、鹿足郡にある山陰屈指の観光地である。青野火山群の活動によって形成された青野山、野坂山、雲井峯などに囲まれた狭長な盆地が生活の舞台となってきた。

現在のところ津和野の歴史は縄文時代早期にまで遡り、高田遺跡（第2図1）、山崎遺跡（同図15）からは押型文土器が出土している。また、高田遺跡からは中期の阿高式、後期中頃の鐘崎式土器がまとまって発見され、対岸の大蔵遺跡（同図3）からは後期後半の西平式土器が採集されるなど、当時この地域が九州地方の情報の及ぶ範囲であったことが窺える。

弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて集落が営まれていたことが高田遺跡で確認され、在地の土器群に混じって吉備地方から運ばれてきた外来の土器が発見されている。町内の古墳は、津和野川最上流の木部地区において鍛冶原古墳群が確認されているのみである。

高田遺跡からは奈良・平安時代の綠釉陶器、皇朝十二錢の一つ承和昌寶（836年初鑄）、大量の土師器、須恵器が発見されており、当時石見国鹿足郡能濃郷（元美濃郡鹿足郷）と呼ばれていたこの地域の重要な拠点が高田地区にあったものと思われる。

中世津和野の領主吉見氏は、弘安5（1282）年に元寇再防備のため能登国から津和野北部の木部地区に入り、その後14C代に津和野城を構えたと伝えられている。文献では吉見氏入部以前の記録はほとんど残されていないが、これまでの高田遺跡の発掘調査では12・13C代の貿易陶磁器が出土しており、吉見氏入部以前に津和野地方にも有力者が存在していたことが考古学的証拠によって明らかとなりつつある。また高田遺跡の別の調査区では、15・16C代の掘立柱建物跡、地鎮祭遺構、木棺墓などが検出され、土師質土器、瓦質の鍋・擂鉢などの日常雑器とともに多数の輸入陶磁器も発見されている。高田遺跡周辺には、吉見氏入部以前に勧請された可能性もある鷲原八幡宮（同図10）などの寺社、伝吉見民部の墓（同図9）、伝アオ様の墓などの中世石塔、天文23（1554）年陶晴賢軍が津和野城を包囲した際の陣城あるいは津和野城の支城が周囲に取り巻いているなど、中世の名残が散在している。また、高田地区には土井ノ内、本門、惣門、裏門、的場などの字名がみられ吉見氏の有力家臣團の屋敷地の存在が推定してきた。ところで、中世の津和野城の大手口は近世以降とは反対側（西側）の喜時雨地区にあったと伝えられ、吉見氏の居館も同地に存在していたとするのが通説である。高田遺跡は、喜時雨地区から見て津和野川を隔てた対岸に位置することからも、吉見氏に関係した有力武士團の本拠地の一角であった可能性が高い。

関ヶ原の役後、吉見氏は毛利氏に伴い萩に移るが、その後、坂崎出羽守の16年間の治領となり、津和野城の大改築・城下町整備など現在の津和野の景観の基礎となる大事業が行われた。その後、亀井氏11代225年間の治世を経て明治維新を迎えることとなる。



- 1.高田遺跡      2.喜時雨遺跡      3.大藪遺跡      4.中座遺跡群      5.津和野城跡  
 6.要害山      7.中荒城跡      8.茶臼山城跡      9.伝吉見民部墓（宝篋印塔）  
 10.鷺原八幡宮      11.陶晴賢本陣跡      12.横瀬遺跡      13.田平の至徳3年銘宝篋印塔  
 14.西中組遺跡      15.山崎遺跡      16.森遺跡      17.丸山遺跡      18.山根遺跡  
 19.伝吉見正頼夫人墓（宝篋印塔）      20.伝吉見頼行墓（宝篋印塔）      21.日浦遺跡

第2図 高田遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 (1/50,000)

### III. 調査の方法と経過

今後予想される、ほ場整備の計画範囲を対象にして合計65ヶ所のテストピット（試掘坑）を設定した。後のは場整備の際の切り盛りを考慮して、切り土部分の埋蔵文化財の遺存状況の確認に重点を置きながら、対象地全域の埋蔵文化財の分布状況の把握に努めた。一つのテストピットは4m<sup>2</sup>（2×2m）を基本とし、遺構面または地山面に達するまで掘り下げ、場合によってはサブトレーンチ（補助試掘坑）を設定し地山の確認をおこなった。遺構については確認調査という性格上、完掘していないものもある。遺物は、仮に機械的な層位で取り上げ、後で土層と概ね対比できるようにした。調査地点の公共座標への取り付けについては、次年度以降に本調査が実施される予定であることから今回はおこなっていない。現地調査はTP1～23の範囲を1994（平成6）年7月1日～9月6日、TP24～65の範囲については1994（平成6）年11月21日～1995（平成7）年1月20日におこなった。

なお、TP1～23の範囲については、今回の調査後、ほ場整備事業主体者である鹿足郡津和野町土地改良区と協議をおこない、TP1周辺の遺跡については盛り土保存、TP16周辺の遺跡については遺構面まで破壊が及ばないことを確認し、1994年度中に、ほ場整備が実施された。

### IV. 調査の概要

TP1は、「本門」の屋号で呼ばれている家の前に設定した。第4～7層に木製遺物を包含しており、少なくとも上層・下層の2遺構面に分けられる。上層遺構は、第4層付近で検出した杭列である（図版1上）。下層遺構は第7層中で検出した溜柵状遺構である（図版1中）。溜柵状遺構は、縦方向に並べられた小さな板材の上に横方向の雑木を置き、さらに縦方向に小さな板材をのせる構造をしており、西方向からの水の流れを意識したものである。屋号「本門」の家の南側には涌水のある池が現在も残っていることから、当時からこの涌水を灌漑に利用していたとも考えられる。1は溜柵状遺構に使われていた板材のひとつで、紐がかけられていた痕跡のある穴が開けられていた。2は端部に面取りのあるもの、3・4は針葉樹材の杭、5～7は広葉樹材の杭である。8～28は須恵器である。8～14は壺の蓋、15～18は壺の身である。16・17は胎土・焼成・色調とも酷似し、同一個体と考えられる。19～22は体部下半に稜を持つもので、金属器を模倣した器形であろう。23・24は回転糸切り痕がある底部である。25・26は壺である。26は第7層より出土し、石に寄り掛かった状態ではほぼ完全な形で発見された。27は器形不明。28は高壺の壺部である。29～32は土師器である。29は赤色顔料の残った蓋端部、30・31は甕、32は布目の圧痕が見られる製塙土器片である。33は中世瓦質土器の擂鉢、34・35は瓦質土



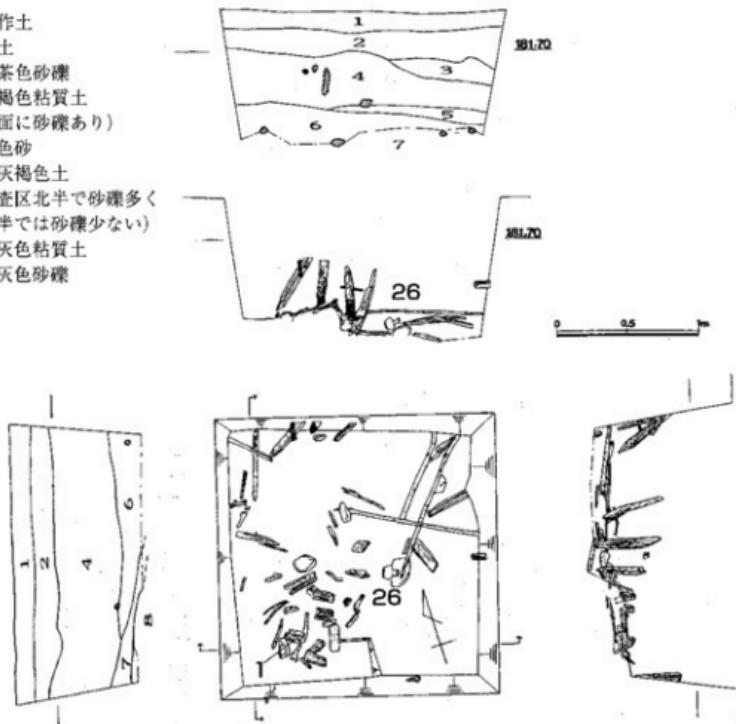
第3図 試掘調査区配置図 (1/2,500)

器の鍋口縁部である。36はいわゆる東播系こね鉢で片口部分の一部が残る。37は青灰色の焼きをした備前焼の壺底部で、内面には叩きの跡がある。38～41は貿易陶磁器で、38・39は白磁、40は鍋蓮弁文のある13C後半の青磁、41は16C代の染め付け磁器である。42は木瓜形をした刀のつばである。43～45は石器である。43は磨製石斧、45は裏面が剥離しているが、一辺にぶい刃があることから石包丁の一部の可能性が考えられる。

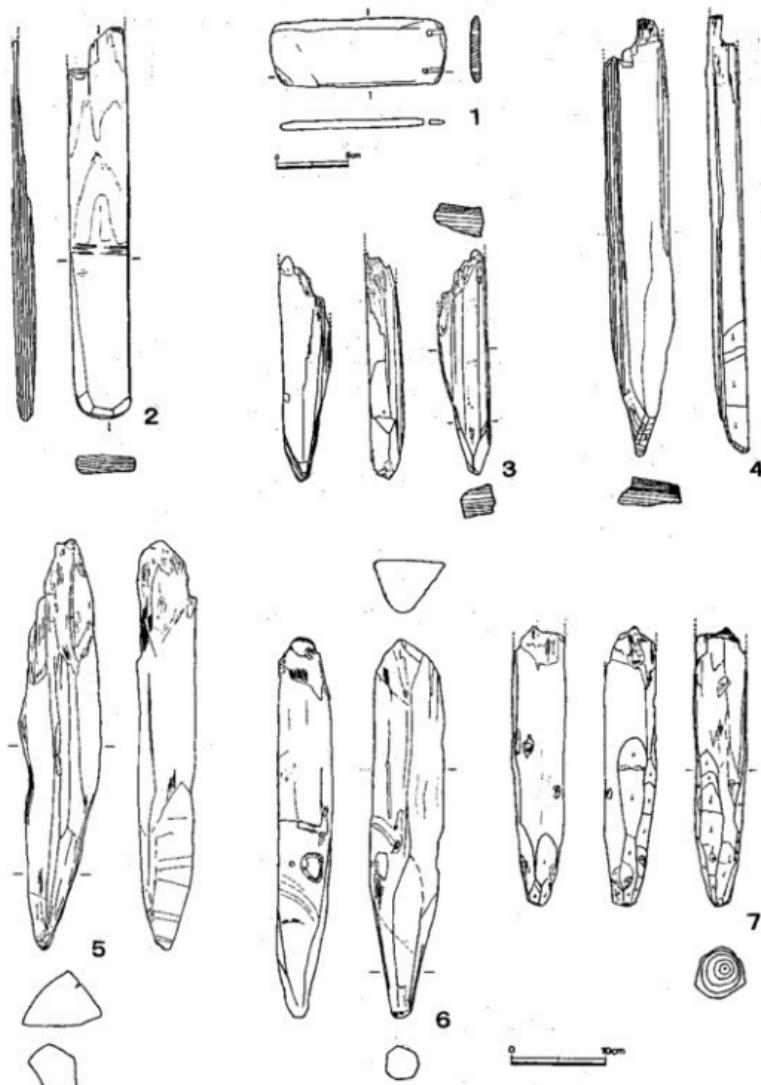
TP2はTP1の北側、ほぼ同じ高さに設定した。古くからある「立道」の闇であることから、遺跡の存在が予想されたが、調査のかぎりでは遺構はなかった。遺物は近世以降の陶磁器が主に出土した。46は床土上半までのところで出土した同安窯系青磁片で13C前半のものである。

TP3はTP2の東側下方に設定した。床土下面で時期不明の柱穴状遺構を1穴検出した。遺物は近世以降の陶磁器が主に出土した。

1. 耕作土
2. 床土
3. 淡茶色砂礫
4. 灰褐色粘質土  
(下面に砂礫あり)
5. 灰色砂
6. 暗灰褐色土  
(調査区北半で砂礫多く  
南半では砂礫少ない)
7. 黒灰色粘質土
8. 青灰色砂礫

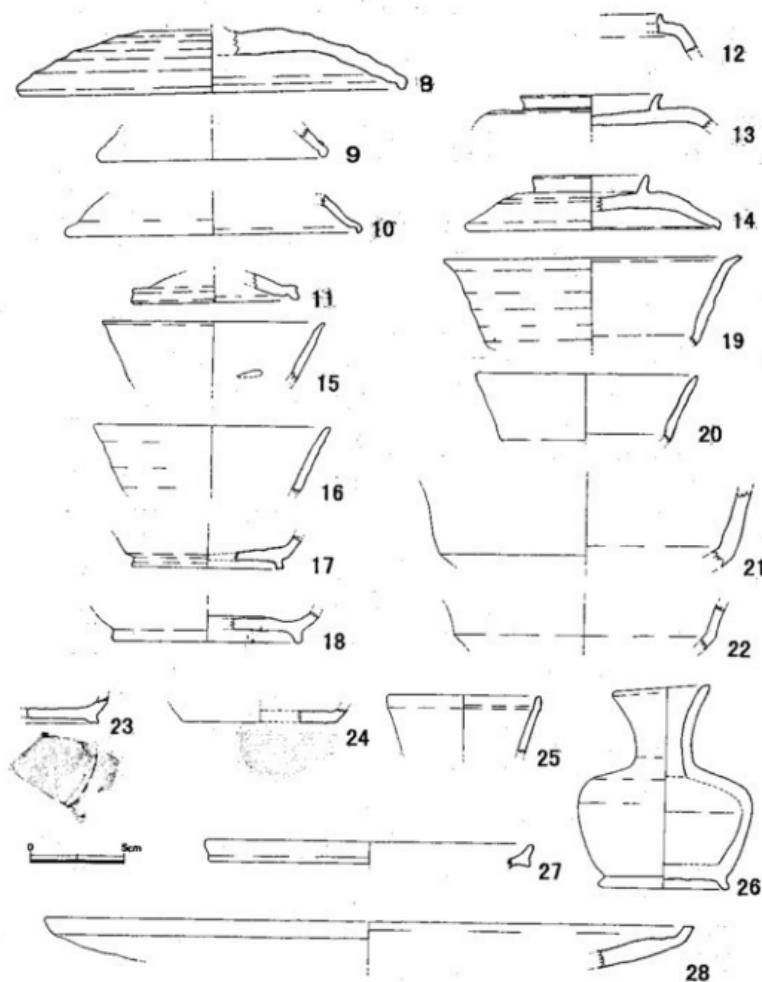


第4図 TP1 (1/40)



第5図 TP1出土遺物 (1・2:1/4, 3~7:1/6)

TP4は立道と永谷川の間に設定した。試掘坑北隅の第6層下面にて焼土・炭を確認したが、遺構は発見していない。第5・6層から中世前半を中心とする遺物が出土した。48・49・50が第5層付近、47・50・51が第6層付近より出土した。47～51は土師質土器坏、52は土師質の鉢である。

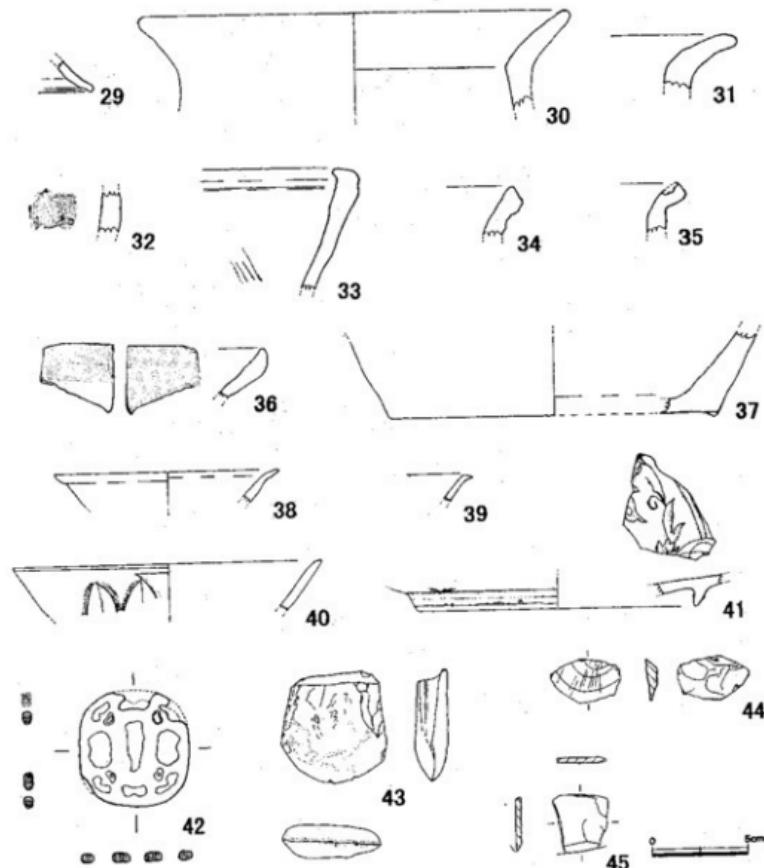


第6図 TP1出土遺物 (1/3)

**TP5**は177m付近の田に設定した。最近のものと思われる土坑が発見されたのみで遺構はない。遺物は近世以降の陶磁器が主に出土しており、耕作土中からは中世の青磁小片が1点出土した。

**TP6**はTP3とTP5の中間付近に設定した。床土下面で時期不明の柱穴状遺構を5穴検出した。遺物は近世以降の陶磁器が主に出土した。

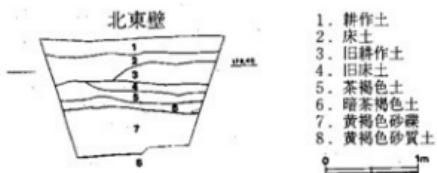
**TP7**はTP5の東下方に設定した。遺構は発見していない。床土上半までのところで**53～55**、排土中より**56**が出土した。**53～55**は白磁、**56**は青磁である。



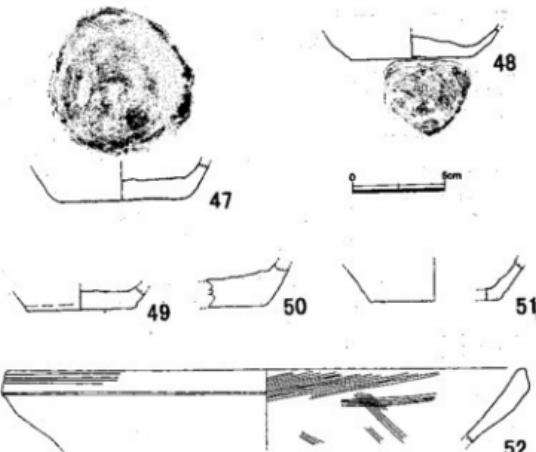
第7図 TP1出土遺物 (1/3)



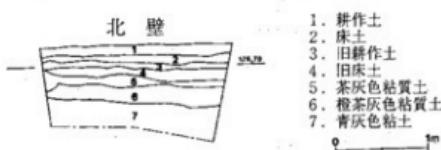
第8図 TP2出土遺物 (1/3)



第9図 TP4 (1/60)



第10図 TP4出土遺物 (1/3)



第11図 TP7 (1/60)

TP8はTP7の南東側下方に設定した。耕作土以下、茶灰色土、青灰色粘質土と続き、涌水が激しかった。地下からは時折ガスも湧いていた。遺構はなく、遺物は近世以降の陶磁器が少量出土したのみである。

TP9は、立道の北側、TP7と同じ高さ付近の田に設定した。遺構は発見していない。遺物は近世以降の陶磁器が主に出土した。

TP10は永谷川の北側の田に設定した。床土以下は、茶褐色土、黄茶色土の厚い堆積が続く。遺構はない。遺物は近世以降の陶磁器が主に出土しており、床土から57が出土した。57は須恵器の坏身である。

TP11はTP10の北側、ほぼ同じ高さあたりに設定した。遺構は発見していない。遺物は近世以降の陶磁器が主に出土した。

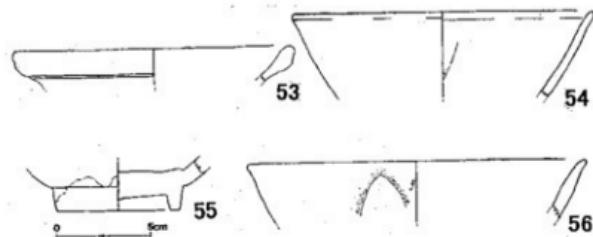
TP12はTP10の東側下方に設定した。第5層茶褐色砂砾層のくぼみを断面で観察したのみで、遺構は発見していない。遺物は近世以降の

陶磁器が主に出土した。

TP13はTP11の北東側下方に設定した。遺構は発見していない。遺物は近世以降の陶磁器が主に出土した。

TP14は永谷川の北側、TP12の東側下方に設定した。床土以下、茶褐色土、砂礫層、黄茶褐色土となり、遺構は発見していない。遺物は近世以降の陶磁器が主に出土した。

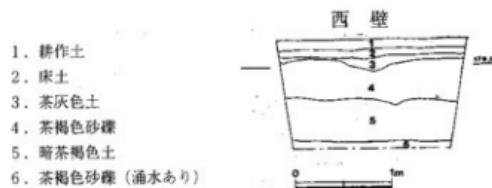
TP15はTP13の東側下方に設定した。第5層下面にうっすらと焼土らしきものを確認したが、遺構は発見していない。第5層暗茶褐色土を中心に平安時代頃の遺物が出土した。第2層までのところで58、第5層付近で59~63が出土した。58は須恵器の高坏、59は内面ケズリ調整の弥生土器らしきもの、60~63は土師質の坏である。



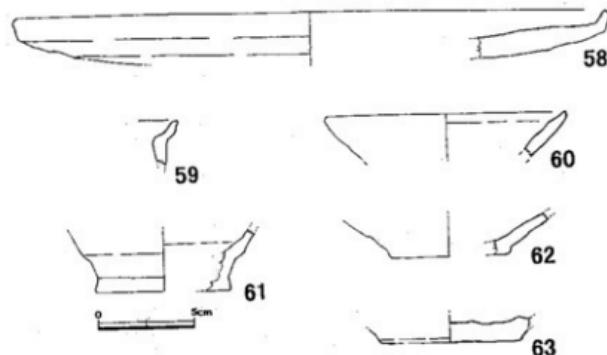
第12図 TP7出土遺物 (1/3)



第13図 TP10出土遺物 (1/3)



第14図 TP15 (1/60)



第15図 TP15出土遺物 (1/3)

**TP16**は立道と永谷川の間に設定した。炭を含んだ第6層下面で柱穴状遺構を発見した。調査のかぎりでは、埋め土は第6層の単一層であった。第3層付近より**67**、第5層付近より**64・65・68**、第6層付近より**66**が出土した。**64**は須恵器蓋で外面ミガキ調整。**65**は須恵器坏身。**66～68**は瓦質土器で、**66**は擂り鉢体部、**67**は火鉢の口縁部、**68**は鍋の足付け根部分である。このほかにも図化不可能な中世の貿易陶磁器片、備前焼片も出土している。

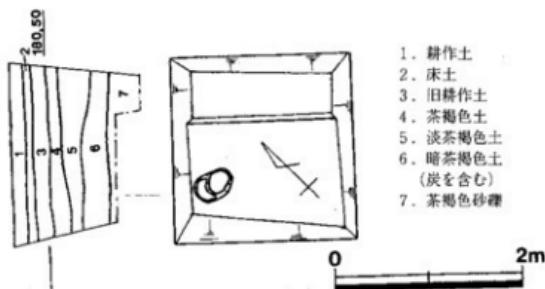
**TP17**はTP1とTP2の中間付近の西上方の田に設定した。第3～4層にかけて杭5本を発見した。出土遺物が少ないため杭の詳細な時期は不明であるが、TP1で検出した上層あるいは下層遺構に対応している可能性もあり注意が必要である。

**TP18**はTP12と

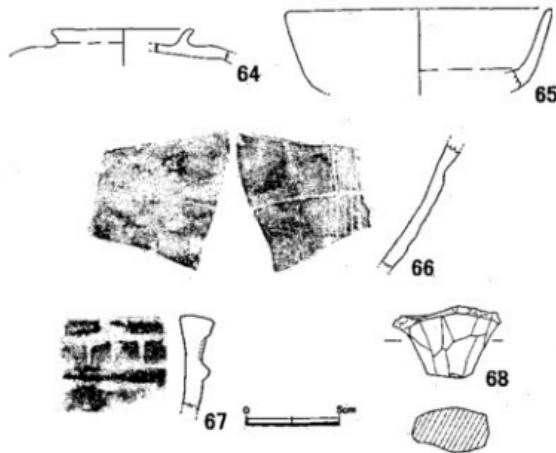
永谷川の間に設定した。床土以下、砂疊層が続き遺構は発見していない。遺物は近世以降の陶磁器が主に出土した。

**TP19**はTP11の北東側下方に設定した。床土以下、暗茶褐色土、黄茶色土となり、遺構は発見していない。遺物は近世以降の陶磁器が主に出土した。

**TP20**は立道と永谷川の間に設定した。古くからある立道の側であることから、遺跡の存在が予想されたが、TP2と同様に調査のかぎりでは遺構はなかった。遺物は



第16図 TP16 (1/60)



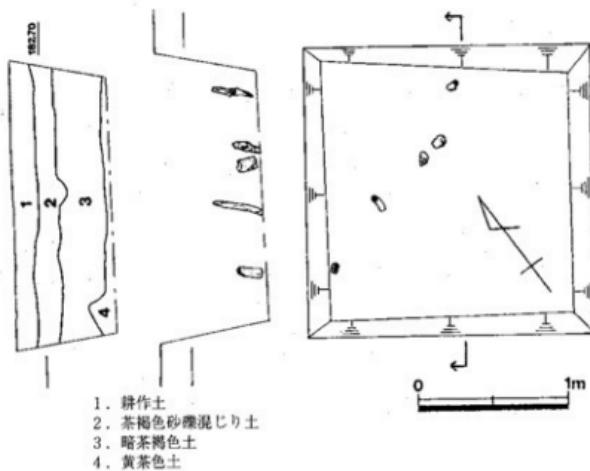
第17図 TP16出土遺物 (1/3)

近世以降の陶磁器が主に出土した。

TP 21はTP 4の東側下方、永谷川に近い場所に設定した。地表下約1.3mまで発掘したが遺構は発見していない。遺物は近世以降の陶磁器が主に出土した。

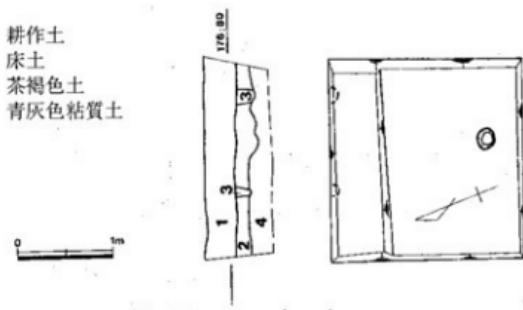
TP 22はTP 5と同じ田の南西側に設定した。床土上面で浅い柱穴状遺構を3穴発見した。遺構そのものも浅く、検出面も浅いため、詳細な時期は明らかでない。TP 22からは69土師質土器皿、70瓦質土器擂り鉢片、71白磁、72・73青磁とともに、弥生土器と思われる内面ハケ調整の土器片も出土した。73は同安窯系の皿で13c前半のものである。

TP 23はTP 1のすぐ西側上方の田に設定した。TP 1で木製遺物包含層が発見されていたため、その広がりを確認することを目的としたが、

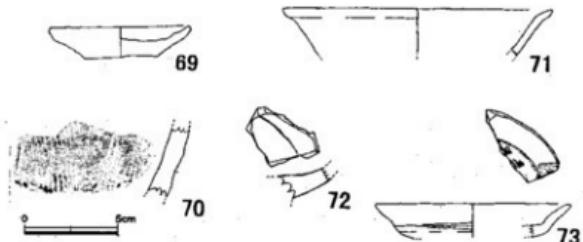


第18図 TP17 (1/40)

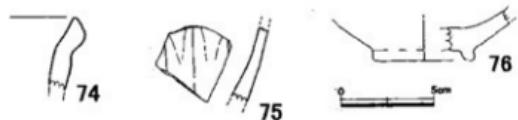
1. 耕作土
2. 床土
3. 茶褐色土
4. 青灰色粘質土



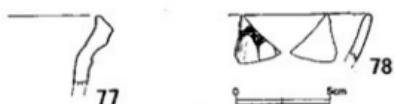
第19図 TP22 (1/60)



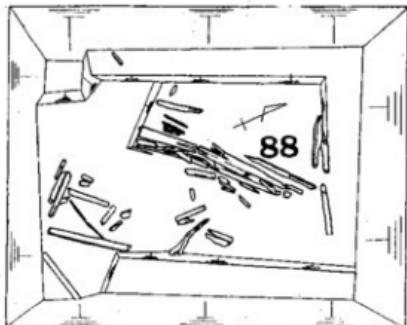
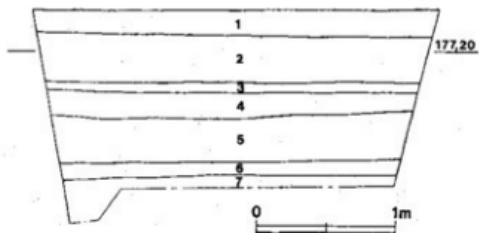
第20図 TP22出土遺物 (1/3)



第21図 TP23出土遺物 (1/3)



第22図 TP25出土遺物 (1/3)



1. 耕作土
2. 灰褐色土
3. 暗灰褐色砂礫混じり土
4. 暗灰褐色土
5. 暗灰色砂礫混じり粘質土
6. 暗灰色砂質土
7. 暗灰色粘質土

第23図 TP27 (1/40)

調査の結果TP23までは木製遺物包含層は広がっていないものと考えられた。TP23からは74瓦質土器鍋、75・76青磁のほかに、古墳時代前期頃の土師器片も出土している。

**TP24**は184.50m付近の畑地に設定した。遺構は発見していない。遺物は近世以降の陶磁器が主に出土した。

**TP25**は字「裏門」の張り出し部分の東側直下、177.40m付近の荒れ地に設定した。床土以下、暗灰褐色土、暗黄褐色砂礫となる。現地表下約0.8mまでもところでは遺構は発見できなかったが、中世期の遺構はさらに深い位置に遺存している可能性もあり、今後とも注意の必要なところであろう。遺物は77瓦質土器鍋、78青磁などが出土している。

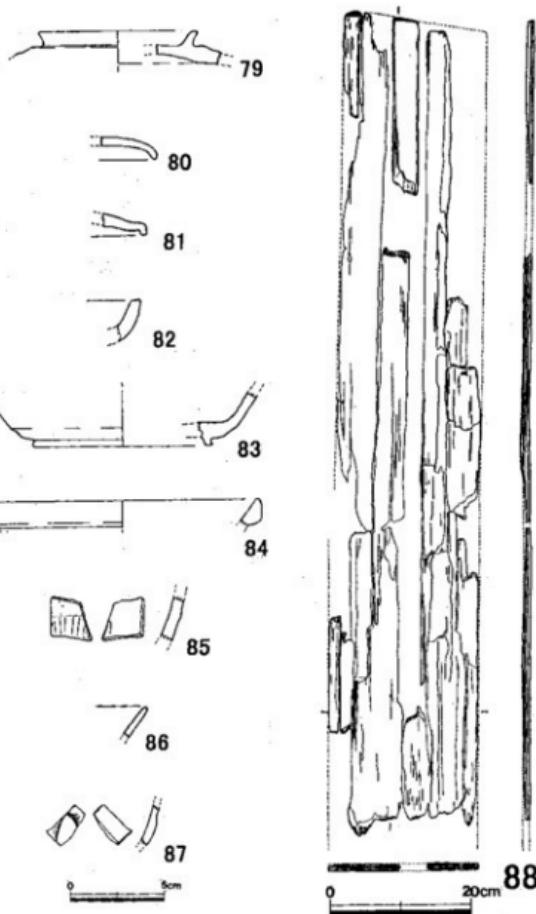
**TP26**は175.80m付近の荒れ地に設定した。北東方向からの段状の地形が終わった裾部にあたる。遺構は発見していない。遺物は須恵器片、土師器片のほか近世以降の陶磁器が主に出土した。

**TP27**はTP26の南西方、一段高くなった田に設定し

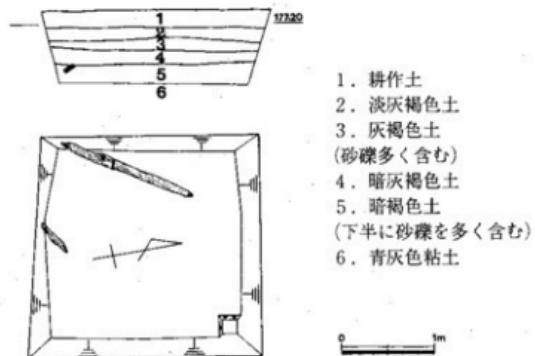
た。第5層下面～第7層にかけて木製遺物が遺存していた。第2層付近から83・84・86・87、第4層までのところで80～82・85、第6層付近で79が出土した。79～83は須恵器、84・85は白磁、86・87は青磁、88は板材である。

TP28はTP27の西方向にやや高くなった田に設定した。第4・5層境付近より自然木が出土した。92・94・96・98は第3層下半～第4層付近から、91・93は第4層付近から、95・99・101は第4層下半～第5層付近から、90・93・97・100・102は第5層から、89は排土中から出土したものである。89～94は須恵器、95は土師質土器、96は瓦質土器、97は内外面に釉薬のかかった灰釉陶器の可能性のあるもの、98～100は白磁、101は越州窯系青磁、102は龍泉窯系青磁、103は黒色漆の残る漆器片である。このほかに中世の褐釉陶器の破片も出土している。

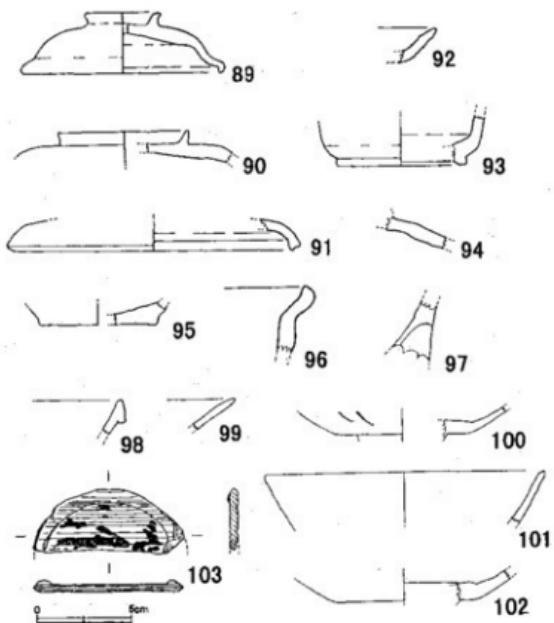
TP29はTP26と同じ荒れ地の北東側に設定した。砂礫層まで発掘したが、遺構は発見していない。遺物は須恵器・土師器が多く出土した。第3層暗灰色粘質土上部より110・116・118、中部より104・105・107・109・111・113・115・117、下部より1



第24図 TP27出土遺物 (79～87: 1/3, 88: 1/8)



第25図 TP28 (1/60)



第26図 TP28出土遺物 (1/3)

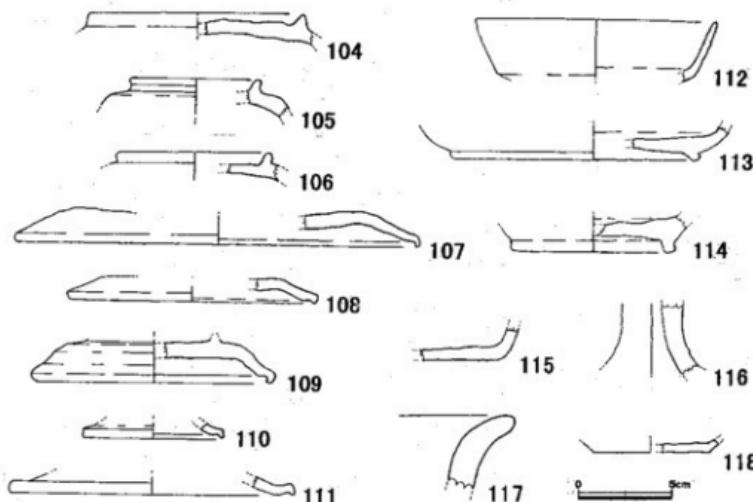
06・108・112・1

14が出土した。104～116は須恵器、117は土師器甕、118は土師質土器片である。このほかに重さ665gの楕円形の鉄滓も1点出土した。

TP30はTP29の西方向、一段高くなった田に設定した。地山上で柱穴状遺構1穴を検出し、遺物の出土状況からは奈良～平安期のものと思われる。第2層灰褐色土までのところで125が出土し、第3層灰褐色土付近より119～121・126、第4層灰褐色粘質土～第5層暗灰褐色粘質土付近より124、第5層～第6層灰褐色土付近より122・123が出土した。119～124は須恵器、125は瓦質土器鍋の足、126は鉛製の鉄砲玉である。鉄砲玉には、発射痕と思われる小さな面が残されている。なお、図示できなかったが、第3層付近より白磁小片も出土している。

TP31はTP30の北

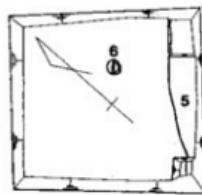
西方向にやや高くなった田に設定した。地山上面で、かまどの可能性のある石組みをもつ大型の遺構を検出した。部分的な発掘にとどめたため詳細はあきらかでないが、堅穴住居跡であった可能性が高い。**127**は弥生土器甕、**128**は土師器甕、**129~132**は須恵器である。**130**は奈良



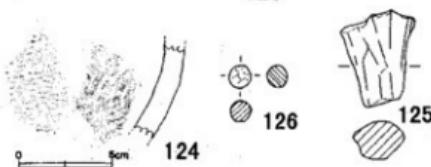
第27図 TP29出土遺物 (1/3)

1. 耕作土
2. 灰褐色土
3. 茶灰褐色土  
(砂粒多く含む)
4. 灰褐色粘質土
5. 暗灰褐色粘質土
6. 灰褐色土
7. 暗黄褐色土

0 1m



第28図 TP30 (1/60)



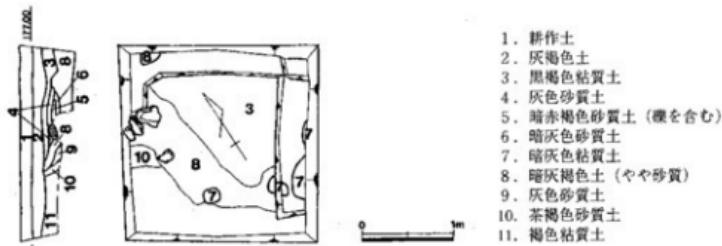
第29図 TP30出土遺物 (1/3)

時代、132は須恵器終末期の9c半ば以降のものである。なお、図示できなかったが、白磁・青磁小片も1点ずつ出土している。

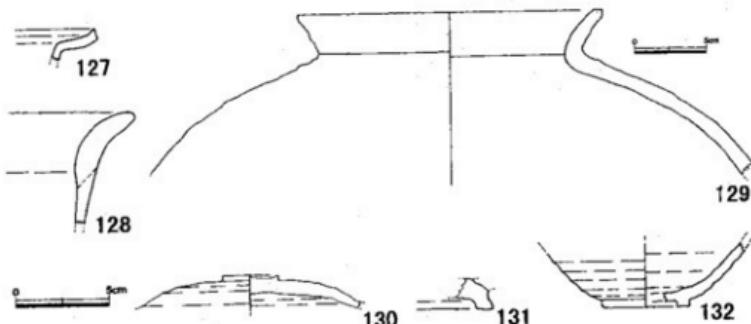
TP32はTP31の南西方向にやや高くなった田に設定した。遺構は発見していない。遺物は須恵器のほか近世以降の陶磁器が少量出土した。

TP33はTP30の北東側、ほぼ同じ高さあたりに設定した。第8層下面で柱穴状遺構を6穴検出した。一部に切り合いが見られることから2時期にまたがる遺跡であろう。第4層までのところで134～139が出土し、第8層までのところで133が出土した。133～137は須恵器、138は土師器、139は中世瓦質土器擂り鉢である。なお、高坏136・137は胎土・焼成の違いから、同一個体とは考えられない。

TP34はTP33の西方向にやや高くなった田に設定した。第5層下面で柱穴状遺構を5穴検出した。一部に切り合いが見られることから2時期にまたがる遺跡であろう。調査区隅に暗渠があったため、層位的な遺物の取り上げができなかった。140～150は須恵器、151は土師質土器、152・153は青磁である。底部調整は148が静止糸切り、149が回転糸切りである。



第30図 TP31 (1/60)



第31図 TP31出土遺物 (127-128-130～132: 1/3, 129: 1/4)

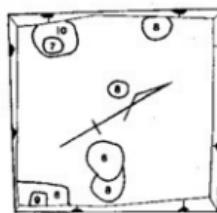
149は須恵器終末期のもので蓋のない形態のものであろう。

TP35はTP34と同じ田の北側に設定した。第3層下面で遺構の可能性のある不定形な落ち込みを確認したが、部分的な発掘にとどめたため詳細はあきらかでない。第1層より162・168、第3層上部より159・160、中部より166・167、下部より155・157・158・161・164、第4層付近より154・156・163・165が出土した。154～163は須恵器、164は土師器、165は土師質土器、166・167は瓦質土器、168は白磁皿の口縁である。154は古墳時代後期にさかのぼるもので、これまでの調査ではあまり出土していなかったものである。

TP36は176.00m付近の畠に設定した。東方向からの段状の地形縁辺部にあたる。耕作土下面より明褐色砂質土の厚い堆積がはじまり、明瞭な遺構は確認できなかった。遺物は須恵器のほか近世以降の陶磁器が少量出土した。

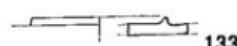
TP37はTP36の西方向にやや高くなった田に設定した。遺構埋め土と遺構面をなす基盤土はあまり明瞭な差ではなかったが、第8層下面で柱穴状遺構3穴を確認した。遺構は切り合っていないものの、土色差から2時期に分けられる可能性がある。第4・7層付近より171～174・176・177・179・180が、第8層付近より169・170・175・178が出土した。169～176は須恵器、177は赤色顔料の塗られた土師器蓋端部、178～180は土師器甕である。172の底部は静止糸切りのちナデ調整をおこなっている。

TP38は182.20m付近の畠に設定した。



- |          |                    |
|----------|--------------------|
| 1. 耕作土   | 8. 暗灰褐色土<br>(炭を含む) |
| 2. 床土    | 9. 暗黄褐色土           |
| 3. 旧耕作土  | 10. 8層と12層の混層      |
| 4. 旧床土   | 11. 灰褐色土           |
| 5. 旧々耕作土 | 12. 暗黄褐色土          |
| 6. 旧々床土  |                    |
| 7. 黒褐色土  |                    |

第32図 TP33 (1/60)



133



134



135



136



137



138

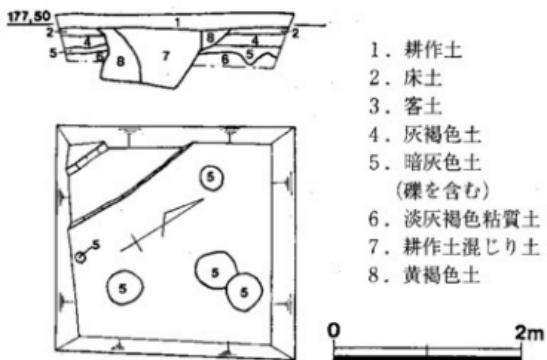


139

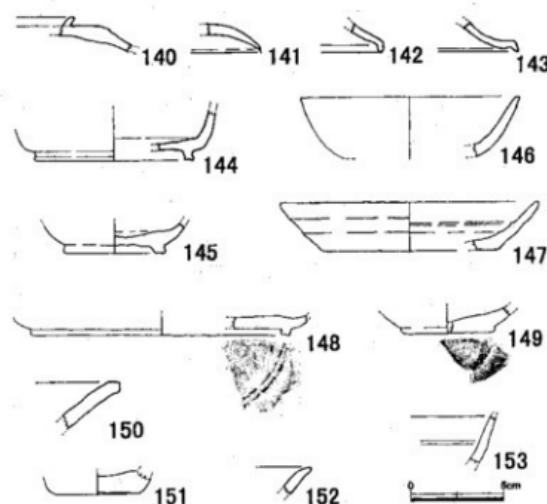
第33図 TP33出土遺物 (1/3)

平坦面造成の際の盛り土のあとを確認できたが、明瞭な遺構はなかった。少量の須恵器のほか、近世以降の陶磁器が主に出土した。床土までのところで**181**が、第3層暗灰褐色土上半で**182**・**183**が出土した。**181**・**182**は須恵器、**183**は瓦質土器である。

**TP39**は**TP38**の北方向、一段高くなった畑に設定した。**TP38**と同様に、平坦面造成の



第34図 TP34 (1/60)



第35図 TP34出土遺物 (1/3)

際の盛土のあとを確認できたが、明瞭な遺構はなかった。遺物は近世以降の陶磁器が主に出土した。

**TP40**は**TP39**の南西側、ほぼ同じ高さの田に設定した。床土下面で炭の広がり、及び多くの遺構らしき土色の差を確認した。遺物は近世以降の陶磁器が主に出土した。耕作土までのところで**184**が、それ以下のところで**185**が出土した。**184**は土師質の口縁部、**185**は壁土と考えられる土塊である。

**TP41**は**183**・**100**m付近の田に設定した。第5層明褐色土まで発掘したが、明瞭な遺構はなかった。遺物は図示したもののはか近世以降の陶磁器が少量出土した。床土までのところで**186**が、第3層灰褐色土上部で**187**が出土した。**186**は土師質の鍋の足端部、**187**は青磁で同安窯

系のものである。

TP 4 2 は TP 4 1 の西方  
向、3段高くなった田に設定  
した。第4層暗褐色土下面に  
凹凸があったが、明瞭な遺構  
とは判断できなかった。遺物  
は近世以降の陶磁器などが少  
量出土した。

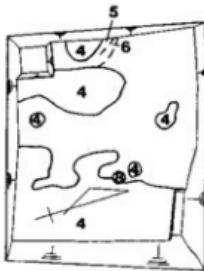
TP 4 3 は 185.70 m  
付近の田に設定した。地表下  
約 1.5 m まで発掘したが、  
遺構は発見していない。遺物  
は須恵器・近世以降の陶磁器  
などが少量出土した。188  
は第3層灰褐色土から出土し  
た瓦質製の火鉢と考えられ  
る。

TP 4 4 は TP 4 3 と同じ  
田の南西側に設定した。地表  
下約 0.8 m まで発掘したが、  
遺構は発見していない。遺物  
はほとんど出土していない。

TP 4 5 は TP 4 2 の西方  
向、186.50 m 付近の田  
に設定した。第4層暗灰褐色  
土下面に遺構とみられる落ち  
込みを確認したが、未発掘の  
ため詳細は不明である。遺物  
は土師質土器片のほか近世以  
降の陶磁器などが出土した。

1. 耕作土
2. 床土
3. 灰褐色土
4. 暗褐色土  
(非常によくしまる)
5. 暗褐色土  
(7層が混入)
6. 黄褐色粘質土  
(4層が混入)
7. 黄褐色粘質土

0 1m



第36図 TP35 (1/60)



154



155



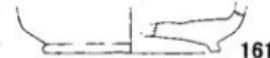
156 158



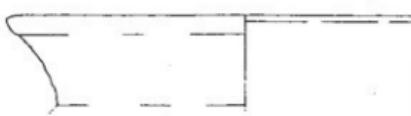
157 159



160 162



161



163



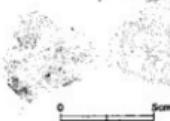
164



165



166



167

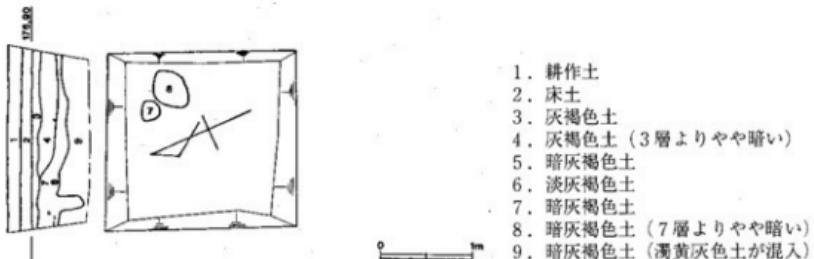


168

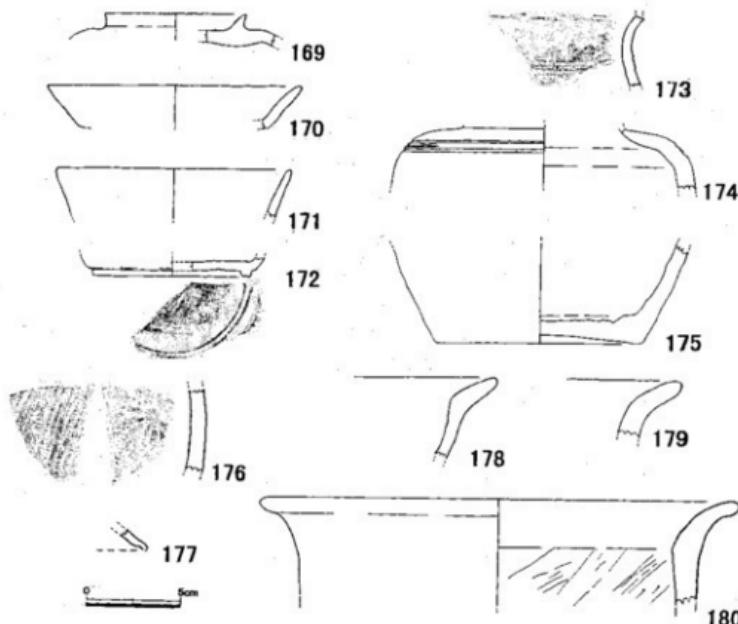
第37図 TP35出土遺物 (1/3)

耕作土中より**190**が、第3層暗茶褐色土中より**189**が出土した。**189**は土師質の口縁部、**190**は玉縁口縁の白磁である。

**TP46**は**TP45**の西方向、3段高くなった田に設定した。第4層下面で柱穴状遺構を5穴検出した。遺物は土師質のものを中心に、須恵器・近世以降の陶磁器なども少量出土した。第4層付近より**192・193**、第4～6層付近より**191**が出土した。**191～193**はいずれも土師質



第38図 TP37 (1/60)



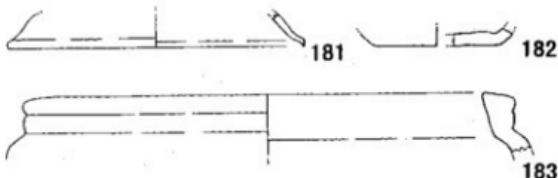
第39図 TP37出土遺物 (1/3)

のもので、191は風化が著しい縄文土器の深鉢らしきもの、192は鍋の体部下半、193は壺底部である。

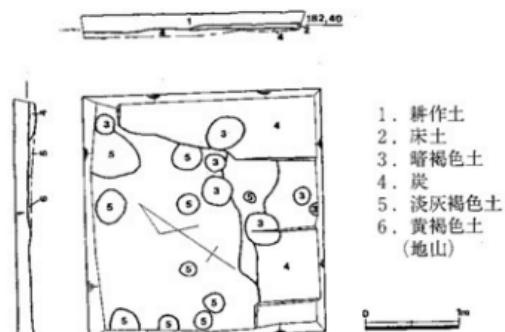
TP47はTP46の西方向、2段高くなつた田に設定した。地表下約1.1mまで発掘したが、遺構は発見していない。遺物は土師質土器片、近世以降の陶磁器などが少量出土した。第4層灰褐色土付近より194、第5層暗灰褐色土付近より195が出土した。194は土師質の壺、195は青磁である。

TP48はTP47の北方向にやや高くなつた田に設定した。涌水が顯著にみられた。地表下約0.7mまで発掘したが、遺構は発見していない。遺物は須恵器、近世以降の陶磁器が少量出土した。第3層灰褐色粘質土・第4層暗灰褐色粘質土付近より197、排土中より196が出土した。196は須恵器、197は新寛永通寶である。

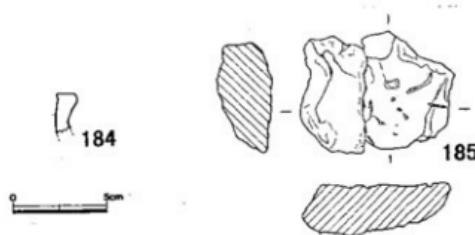
TP49はTP46の西



第40図 TP38出土遺物 (1/3)



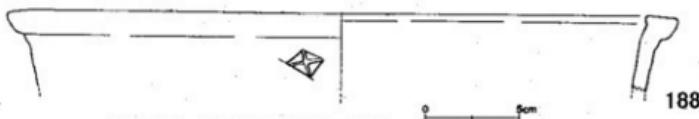
第41図 TP40 (1/60)



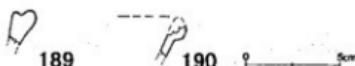
第42図 TP40出土遺物 (1/3)



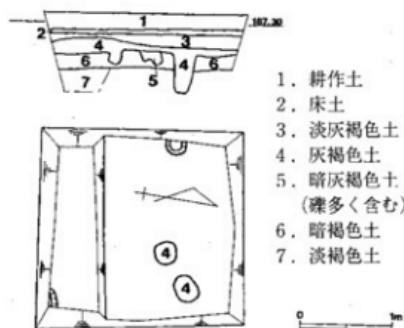
第43図 TP41出土遺物 (1/3)



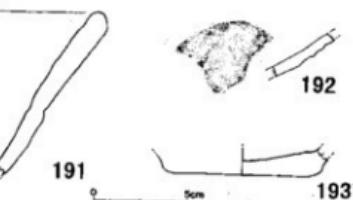
第44図 TP43出土遺物 (1/3)



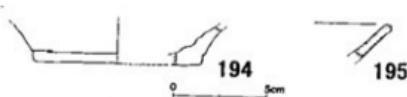
第45図 TP45出土遺物 (1/3)



第46図 TP46 (1/60)



第47図 TP46出土遺物 (1/3)



第48図 TP47出土遺物 (1/3)

方向、堤の土手の下に設定した。地表下約0.7mまで発掘したが、遺構は発見していない。遺物は須恵器、近世以降の陶磁器が少量出土した。

TP50はTP49の南東側、やや低くなった田に設定した。地表下約1.5mまで発掘したが、遺構は発見していない。遺物は土師質土器片のほか陶磁器が少量出土した。第3層淡灰褐色土・第4層灰褐色土付近より198白磁が出土した。

TP51はTP50の南東側、やや低くなった田に設定した。第7層茶褐色土上面で部分的な落ち込みを確認したが、明瞭な遺構であるとは判断できなかった。遺物は土師質土器片のほか近世以降の陶磁器が少量出土した。

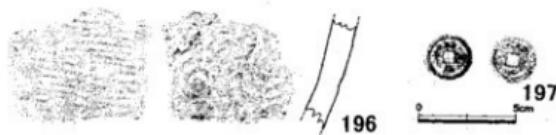
TP52はTP51の北東方向、2段低くなった田に設定した。調査区壁面の観察により、第3層下面に柱穴状遺構1穴を確認した。遺物は土師質のものが主に出土した。耕作土より207・210、床土より201~203・208、第3層上半より200・204・206、下半より205・209、排土中より19

9が出土した。199～205は厚手の底をもつ土師質壺、206は土師質口縁部、207・208は瓦質土器、209は白磁で12C以降のもの、210は同安窯系の青磁皿で13C以降のものであろう。

TP53はTP52の東方向、1段低くなった田に設定した。地表下約0.7mまで発掘したが、明瞭な遺構は発見していない。遺物は土師質土器片のほか近世以降の陶磁器が少量出土した。床土～第4層灰褐色土付近より215・216が、第5層暗灰褐色土付近より211～214が出土した。211～214は土師質のもの、215・216は鉄製品である。

TP54は195.00m付近、堤の土手の下の田に設定した。地表下約0.8mまで発掘したが、明瞭な遺構は発見していない。遺物は床土までのところで近世以降の陶磁器が1点出土したのみである。

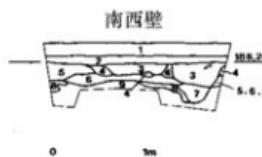
TP55はTP54の東



第49図 TP48出土遺物 (1/3)

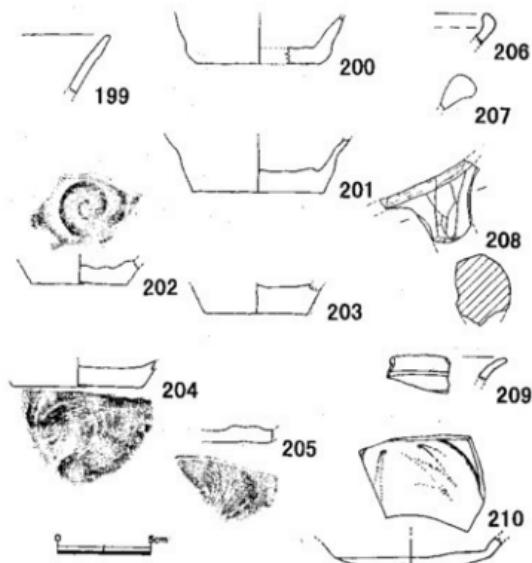


第50図 TP50出土遺物 (1/3)

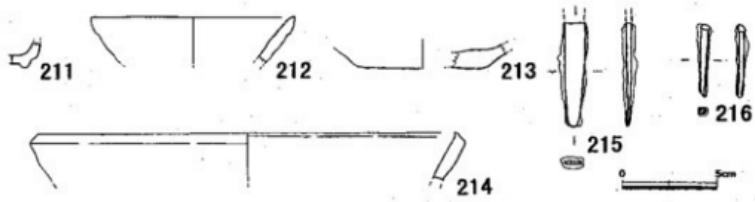


第51図 TP52 (1/60)

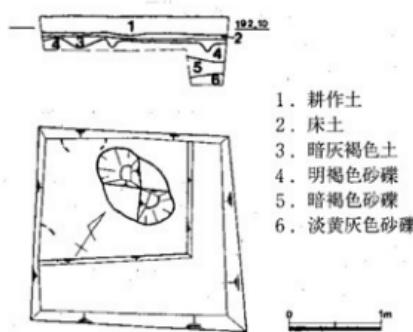
1. 耕作土
2. 床土
3. 灰褐色土
4. 淡灰褐色土
5. 褐色土
6. 淡褐色土
7. 暗褐色土
8. 黑褐色土
9. 黄灰褐色土



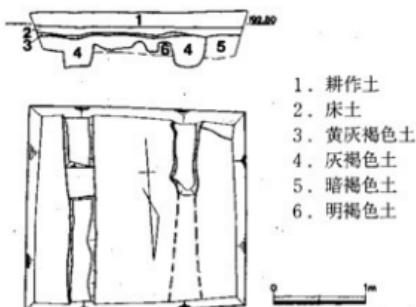
第52図 TP52出土遺物 (1/3)



第53図 TP53出土遺物 (1/3)



第54図 TP55 (1/60)



第55図 TP57 (1/60)

方向の田、西方向からのびる段状地形の縁部に設定した。調査区壁面で確認したものも含め、皿状に落ち込んだ遺構を3基確認した。遺構埋め土は第3層である。遺物は床土までのところで近世以降の陶磁器が主に出土した。

**TP56**はTP54の南側、堤の土手直下の田に設定した。地表下約0.8mまで発掘したが、明瞭な遺構は発見していない。遺物は床土までのところで近世以降の陶磁器が主に出土した。

**TP57**はTP56の東方向、3段低くなった田に設定した。第4層下面で、南北に並行してのびる溝状遺構2条を検出した。遺物は床土までのところで近世以降の陶磁器が主に出土し、溝の検出面で不明鉄製品が出土した。

**TP58**は193.90m付近の田に設定した。町倒し以前の古い水田の畦畔が見つかったのみで、それ以前の遺構は発見していない。この場所に残された古い水田の畦畔は、石垣ではなく木で土止めをおこなっていた。雑木を横に置き、前面を木杭で

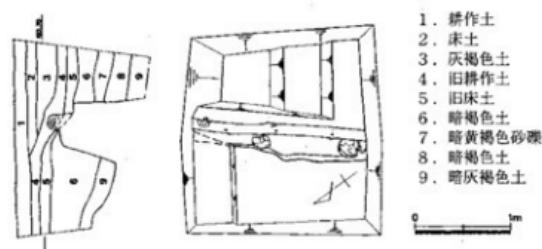
止め、背面のすきまには人頭くらいの石をところどころに詰めていた。木杭の接する部分には横木にえぐりが入れられていた。遺物は近世以降の陶磁器が主に出土した。

**TP 59** は TP 58 の東方向、1段低くなった田に設定した。地表下約0.7mまで発掘したが、遺構は発見していない。遺物は近世以降の陶磁器が主に出土した。**217** は床土までの所で出土した細線蓮弁のある青磁片で15C末以降のものである。

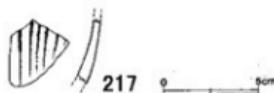
**TP 60** は TP 59 の北東方向、3段低くなった田に設定した。地表下約1.1mまで発掘したが、遺構は発見していない。遺物は近世以降の陶磁器が少量出土した。

**TP 61** は 191.70m 付近の田に設定した。床土以下、砂礫・地山層となり、遺構は発見していない。遺物は近世以降の陶磁器が少量出土した。

**TP 62** は永谷川の河岸段丘縁辺部の 189.10m 付近の田に設定した。第3層灰褐色土下面に部分的な凹凸が



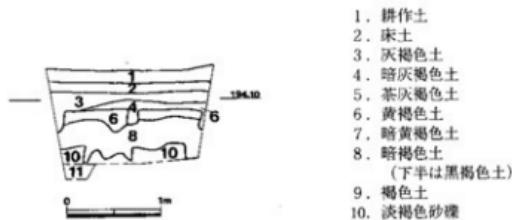
第56図 TP58 (1/60)



第57図 TP59出土遺物 (1/3)



第58図 TP63出土遺物 (1/3)



第59図 TP64 (1/60)

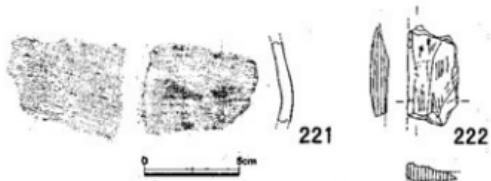
- 1. 耕作土
- 2. 床土
- 3. 灰褐色土
- 4. 暗灰褐色土
- 5. 茶灰褐色土
- 6. 黄褐色土
- 7. 暗黄褐色土
- 8. 暗褐色土  
(下半は黒褐色土)
- 9. 褐色土
- 10. 淡褐色砂礫
- 11. 赤褐色砂礫



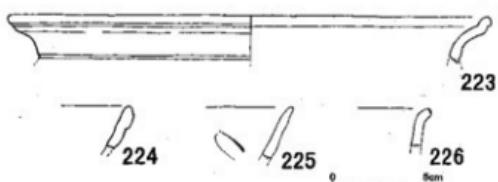
第60図 TP64出土遺物 (1/3)



第61図 TP65 (1/60)



第62図 TP65出土遺物 (1/3)



第63図 表採遺物 (1/3)

みられたが、明瞭な遺構であるとは判断できなかった。遺物は近世以降の陶磁器が主に出土した。

TP63はTP51の東方向、1段低くなった田に設定した。第3層灰褐色土下面に部分的な落ち込みがみられたが、明瞭な遺構であるとは判断できなかった。遺物は土師質土器、須恵器、近世以降の陶磁器が少量出土した。第3層灰褐色土より218・219が出土した。218は須恵器蓋、219は土師質の口縁部である。

TP64は194.40m付近の田に設定した。調査区壁面で第3層及び第4層の柱穴状の落ち込みを確認した。遺物は近世以降の陶磁器が主に出土しているが、弥生土器あるいは土師器とみられる破片も少量出土している。220は第3～4層付近から出土した、弥生土器あるいは土師器とみられる口縁部である。

TP65はTP64の西方向、197.30m付近の畑に設定した。今回の試掘調査地の中では最高所にあたる。第3層が土坑状に落ち込んでいることを確認した。遺構内遺物がないことから、この遺構の詳細は不明である。TP65からは近世以降の陶磁器が主に

出土している。床土から 222 が、第3層から 221 が出土した。221 は内外面に条痕文のある縄文土器片、222 は石製品で硯の一部と思われる。

第61図には今回の調査で表採したもの、あるいは整理中に出土地点が不明瞭になってしまったものを掲載した。223 は縄文土器、224 は玉縁口縁の白磁、225・226 は青磁口縁部である。

第1表 1994年度高田地区試掘調査地一覧表

TP	所在地	字名	TP	所在地	字名	TP	所在地	字名
1	大字高峯382	ドヨブツ	23	大字高峯382	ドヨブツ	45	大字高峯280	天皇溢
2	"	"	24	220-1	家之廻り	46	"	"
3	"	"	25	265	四方藪	47	"	"
4	359	堅畑	26	227	込泥	48	279	"
5	381	千代留尻	27	226	竹添	49	"	"
6	"	"	28	"	タ	50	316	"
7	376-3	七百田	29	227	込泥	51	"	"
8	375	千代留	30	226	竹添	52	281	"
9	361	ニドヲサ	31	"	タ	53	"	"
10	264-1	四方藪	32	"	タ	54	303	天皇原
11	265	"	33	217	前田	55	294	"
12	262	河原畠	34	"	タ	56	302	"
13	260	"	35	"	タ	57	295	"
14	252	"	36	201	鴻寄	58	347-1	永谷尻
15	257-2	"	37	199-1	家ノ下モ	59	349	溢田
16	358-3	"	38	220-5	家之廻り	60	"	"
17	382	ドヨブツ	39	"	タ	61	"	"
18	236	河原畠	40	"	タ	62	353-2	下河原
19	265	四方藪	41	273-2	裏門	63	293	天皇原
20	356	本門口	42	273-内2	タ	64	400-1	家ノ背戸
21	359	堅畑	43	275	咲門	65	406-1	家ノ前
22	381	千代留尻	44	"	タ			

## V. 小 結

今回の試掘調査では、高田地区北半の遺跡の分布状況を概ね把握することができた。縄文～古墳時代の遺跡は、TP 64・65周辺で遺物が若干出土したものの、今回の調査範囲ではほとんど確認していない。このことは、高田地区南半で多くの遺物が出土した状況と対照的であり、縄文～古墳時代の遺跡は高田遺跡南半を中心に分布しているものと考えられる。

奈良～平安期の遺跡はTP 26～37周辺に集中して確認でき、1991年度試掘調査および1992年度本調査T・U・V区で確認した同時代の遺跡がかなり広大な範囲に広がっていることが明らかとなった。このうち、遺構の確認できたところはTP 30以北の台地状地形の部分であり、やや谷地形となるTP 27・28付近では木製遺物を含む包含層が存在していた。また、TP 1では奈良～平安期の木製溜柵状遺構を確認し、TP 17では木製杭を検出していることから、TP 1～17周辺には同時期の灌漑施設が存在している可能性がある。なお、TP 35では古墳時代後期にさかのほる須恵器片が出土しており、奈良～平安期の集落の先駆けとなる遺跡の存在を示すものとして注目される。

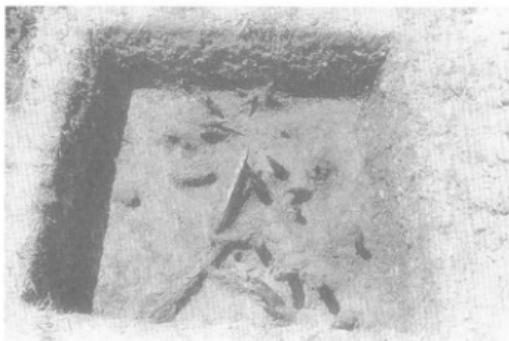
中・近世の遺構・遺物は内容に粗密はあるものの、全域で散在的に確認できた。確実に中世期の遺構であることが確認できたのは、TP 9・16・46・52のみであり、他のTPは他時期の遺構との判別がつけられなかったものや、流れ込み遺物と考えられるものである。TP 9・16は相互に離れた場所にもかかわらず、砂疊層上面に中世期の遺物包含層・焼土が存在するという共通性があり注目される。TP 46・52では中世前半期の遺物を主に伴った柱穴を検出しており、同時期の遺跡が周辺に存在しているものと推定される。TP 1・23では平安期以降の貿易陶磁器が多く出土し、西上方の字「本門」方面からの流れ込みと考えられる。TP 7・22でも平安期以降の貿易陶磁器が多く出土しており、TP 22の床土下面で確認した柱穴状遺構に伴う遺物とするか、単なる流れ込み遺物とするか、今回の調査では判断できなかった。TP 27・28でも、平安期以降の貿易陶磁器が多く出土しており、西上方の字「裏門」方面からの流れ込みを想定できる。

なお、遺物の出土量が少ないため、時代推定の難しかった場所はTP 40・55・57である。TP 40では柱穴状遺構、炭の堆積を確認しており、「家之廻り」という字名からも注意が必要であろう。TP 55では浅い皿状の土坑、TP 57では並行する2条の溝状遺構を検出した。これらは字「天皇原」と呼ばれる眺望良好な高台に当たり、遺構の時期決定と性格解明が今後の課題である。

(参考文献)

沖本常吉編1970 「津和野町史」第1巻

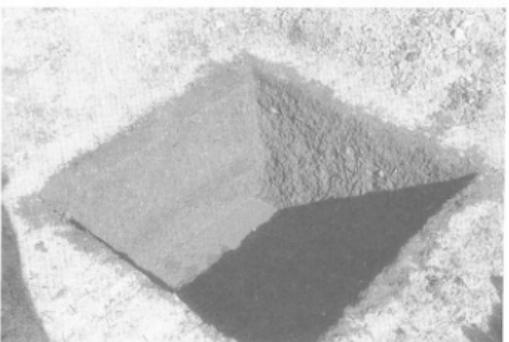
TP 1  
上層遺構面  
(北より)



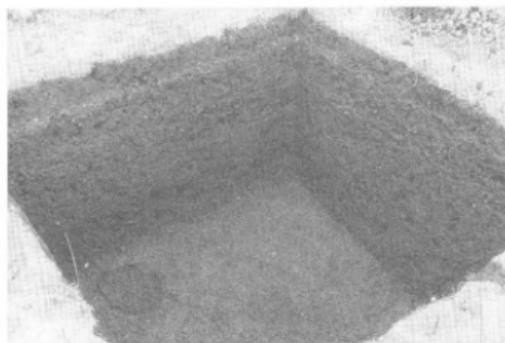
TP 1  
下層遺構面  
(北より)



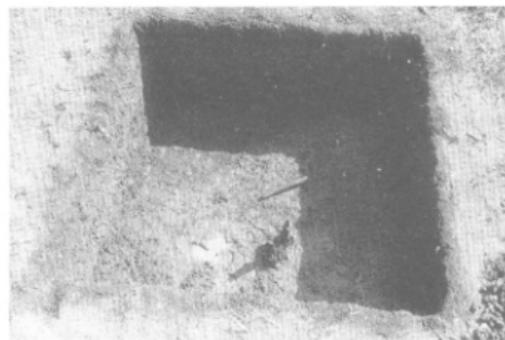
TP15



図版2



TP16  
遺構検出状況  
(南より)



TP17  
(北東より)



TP27  
(北東より)

TP34  
遺構検出状況  
(南東より)



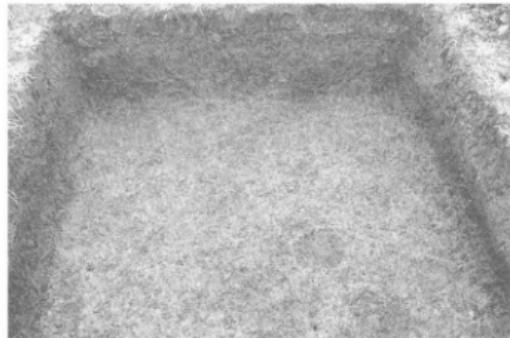
TP35  
遺構検出状況  
(北より)



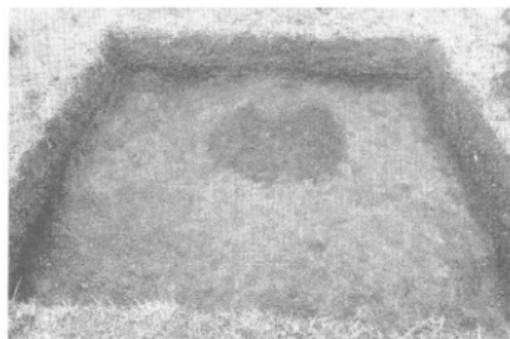
TP40  
遺構検出状況  
(北西より)



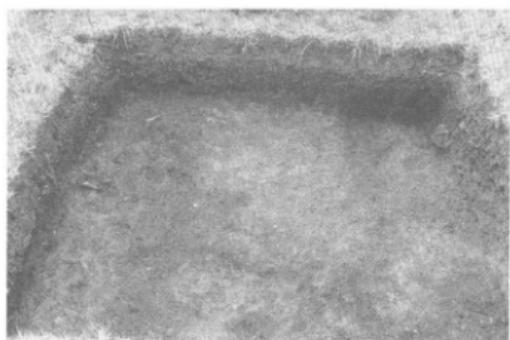
図版4



TP46  
遺構検出状況  
(東より)



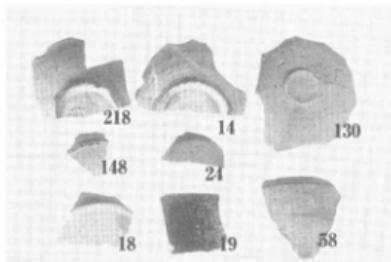
TP55  
遺構検出状況  
(南東より)



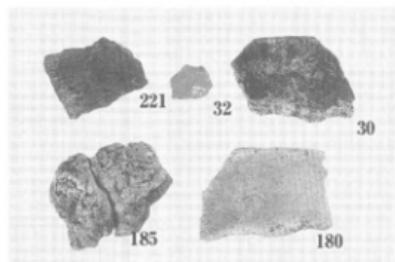
TP57  
遺構検出状況  
(北より)



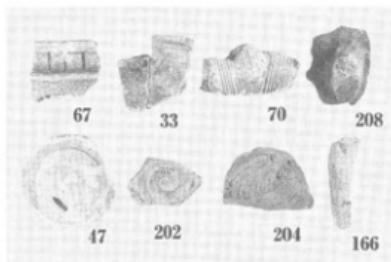
須恵器壺



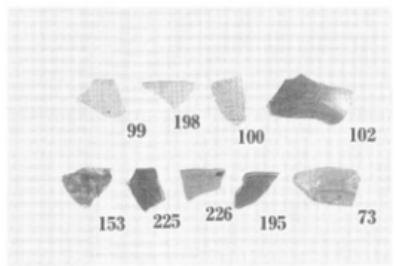
須恵器



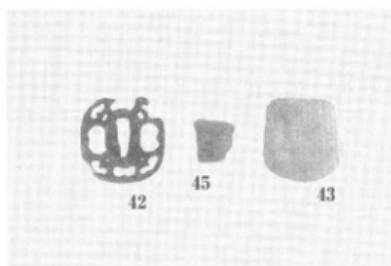
縄文・土師器等



中世瓦質・土師質土器

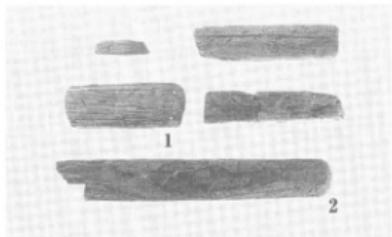


貿易陶磁器

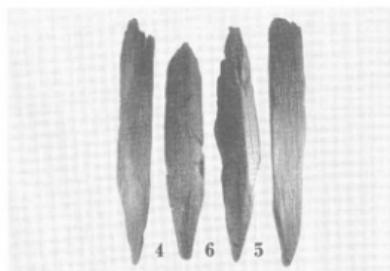


鉄製品・石製品

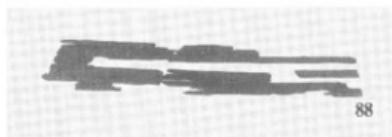
図版 6



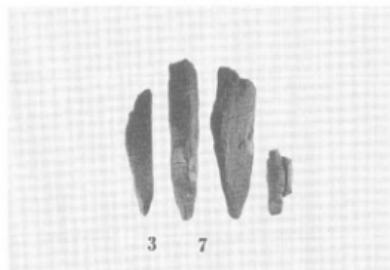
TP 1 出土木製品



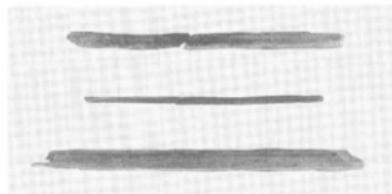
TP 1 出土木製品



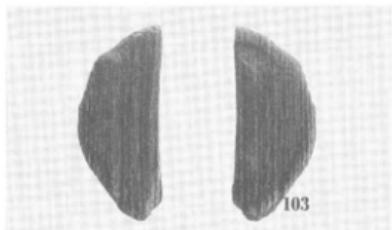
TP27出土木製品



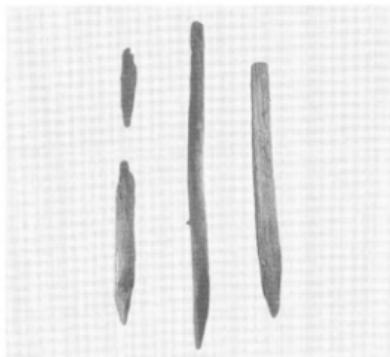
TP 1 出土木製品



TP27出土木製品



TP28出土漆器



TP27出土木製品

# 報告書抄録

ふりがな 書名	たかたちくまいぞうぶんかざいぶんぶちょうさがいようほうこくしょ 高田地区埋蔵文化財分布調査概要報告書
副書名	
卷次	III
シリーズ名	津和野町埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	
編著者名	宮田 健一
編集機関	津和野町教育委員会
所在地	〒699-56 島根県鹿足郡津和野町大字森村口127 TEL 08567-2-0300
発行年月日	西暦 1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° °'	東経 ° °'	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかた 高田	しまねけんかのあしげん 島根県鹿足郡 つわの ちとうぐん 津和野町大字 高峯 たかね 高田地区	W	21	34度 27分 17秒	131度 45分 13秒	19940711 ~ 19950120	260	遺跡範囲 確認

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高田	集落跡	奈良 平安 中世	溜め斜状遺構 1所	須恵器 土師器 瓦質土器 土師質土器 貿易陶磁器	高田遺跡北半の遺跡 の分布状況を確認

津和野町埋蔵文化財報告書  
高田地区埋蔵文化財分布調査概要報告書Ⅲ

1995（平成7）年3月

発行 津和野町教育委員会  
島根県鹿足郡津和野町大字森村口127  
印刷 (有)坂田印刷  
島根県鹿足郡津和野町大字後田口702

